

幼児期の母子関係と思いやりの形成

(分担研究：乳幼児期からの情緒の形成に関する研究)

森 下 正 康

要 約

幼児期の母子関係が子どもの「思いやり」の形成にどのような影響を与えるかについて、相互作用とモデリングという視点から検討した。4歳児と5歳児の母親241名を対象に質問紙を実施した。分析の結果、年齢や男女によって結果は異なっていたが、一般的に「誘導的ストラテジー」「向社会的行動」「愛他心」「道徳観」「共感性」などを豊かにもっている母親との相互作用を通じて、子どもは思いやりを形成してゆくことが示唆された。

見出し語

親子の相互作用 モデリング 向社会的行動 共感性

■ 問 題

日常用いられる「思いやり」ということばは必ずしも明確ではない。普通、「思いやり」ということばは他の人に対する同情や心遣いというような情緒的な側面と、他の人に対する援助行動のような行動的な側面の両方を含んでいる。心理学の概念としての共感性 (empathy) や 向社会的行動 (prosocial behavior) に近い概念である。

共感性は他者の要求や感情を正確に読み取る認知的因子と、他者の感情と同じような感情をもつことができるという情動的因子とから成り立っている (森下・仲野、1996)。向社会的行動は共感や愛他心 (altruism) などを媒介として他者の利益のためになされる行動である。したがって日常使われる「思いやり」概念は、共感性の情動的な成分や愛他心などを含む向社会的な態度だと考えられる。したがって、「思いやり」は向社会的行動そのものではないがそのような行動を生起させる態度や特

性である。具体的にいえば本研究では、幼児の「思いやり」をその母親の評定によって測定する。共感性のように外から直接には観察できないものも、普段その人の表情などを含む行動の観察を通して推測されている。母親の評定は、日頃の子どもの様子や行動の観察に基づいてなされたものである。

「思いやり」の形成にとって、幼児期の環境や経験が非常に大きな影響を与えたと考えられている (Eisenberg & Mussen, 1989)。その場合、幼児期の環境や経験が、幼児期から大人までのどの時期の「思いやり」の形成に影響するのか。幼児期に形成された「思いやり」は一生変化しないものなのか。このような疑問に答えることはたいへん難しい。そのためには長い年月が必要である。

認知発達の領域において、東ほか (1989) の研究では、3歳時期の親の変数は5-6歳時期および11-12歳時期の子どもの知的発達に影響していた。これは彼らが指摘するように、3歳時期の親の変数がその後の事象に遠隔的に効いているの

ではなくて、同じ母親とその子どもとの関係が続いていくので、その母親の期待や態度がずっとそれぞれの時点で働き続けるためだと考えられる。

本研究においては、幼児期の親子関係のなかで子どもの「思いやり」の形成にどのような要因が働くかを明らかにしたい。「思いやり」の形成に関して、まず親の養育態度や親子の相互作用そのものが注目される。これまで親の受容的態度や行動が子どもの「思いやり」の形成に影響するというのをいくつかの研究が指摘してきた(Hoffman, 1963; Zahn-Waxler et al., 1979)。また、相互作用という視点から小嶋(1991)は、環境が個体の発達に影響するとともに、個体も環境に影響することを通して、両者が相互調整的な変化をしていくので、能動的で自律的な存在としての個体も自己の発達のコースの決定に参与すると指摘する。

このような視点から末田ほか(1983)は、小学3年生とその母親を対象として、たとえば「いつも子どもが楽しみにしているテレビ番組の時間に、お母さんがどうしても見たい番組があるとき」というような場面で、母親と子どもの間にどのような相互作用が生じるかを検討した。その結果、母親と子どもの評定パターンは相互に一致していた。母親が説明的・誘導的のストラテジーを示すと、子どもは従順・自制的な反応をし、母親が力中心のストラテジーを示すと、約半数の子どもが反抗・拒否、半数の子どもが従順・自制的な反応を示した。その逆に子どもが従順・自制的な態度を示すと母親は誘導的な反応をし、子どもが反抗・拒否的な態度を示すと母親は力中心の反応をするというように、両者間に対応関係が生じ、これらが次々と連鎖してゆくということが示唆された。このような関係は、場面を変えた場合も基本的には変わらなかった。このように相互作用のパターンが繰り返され、一般性を持つと、従順とか反抗とかの特性が子どもに形成され、親の側には協調とか統制とかの態度が形成されるのではないかと考えられる。したがって、母親の養育ストラテジーが誘導的であるほど子どもに「思いやり」が形成されるのではないかと考えられる。

さらに「思いやり」がどのように形成されるかを考える場合、親と子どもの相互作用のなかで子どもは親の態度や行動を観察しているという点に注目する必要がある。つまり、子どもは親の態度や行

動を選択的に自己の中に取り入れるというモデリングが注目される(森下、1996)。Bandura & Walters (1963)によれば、攻撃行動や向社会的行動の学習はモデルの行動とモデルの受けた強化をみただけで成立する。実際に「思いやり」の形成にはこのようなモデリングが大きな影響を与えていると考えられる。

従来、援助が必要だという状況の認知と「思いやり(向社会的)行動」とを媒介する変数として共感性が重視されてきた(Mussen & Eisenberg-Berg, 1980; 高野、1982)。しかし、幼児や児童を対象とした研究では、共感性の効果はそれほど明確ではない(桜井、1986; 首藤、1985)。そこには共感性の定義や測定の問題も関連している。大人を対象とした研究において、向社会的行動の動機には種々のものがあり、それを促進する動機や抑制する動機の因子が明確にされてきた(高木、1983; 森下・信濃、1995)。向社会的行動について、大人の動機が幼児の動機と同じであるとは考えられないが、親の動機が子どもの動機の形成に何らかの影響を与えており、さらに「思いやり」の形成に影響している可能性がある。

以上、子どもの思いやりは、環境との相互作用の中で形成される。特に、子どもにとって大切な人のかかわりの中で、その人からやさしく受け入れてもらえるかどうかということと、その人がどのようなモデルとなっているかが重要である。このような相互作用とモデリングという視点から、本研究では、母親の養育ストラテジーや養育態度、向社会的行動の動機が幼児の「思いやり」の形成にどのような影響を与えるかについて検討する。

■ 方法

1. 対象

和歌山市の郊外にある幼稚園の園児の母親が調査の対象となった。4歳児の母親173名、5歳児の母親163名に対して、幼児を通じて質問紙を配り、無記名で記入を求めた。回収されたデータは4歳児147(回収率85.0%)、5歳児163(81.0%)であった。その内、記入もれなどのないデータについて、4歳児126(男児68、女児58)、5歳児115(男児64、女児51)、計241データを分析対象とした。

2. 調査日

1996年12月

3. 幼児の「思いやり」の測定

幼児の「思いやり」を測定するために、森下(1985)の尺度(8項目)を用いた。なお、反応セットを除去するために、攻撃性を測定する8項目を追加して計16項目(Table 1)をランダム

Table 1 幼児の思いやりと攻撃性の項目

	1. めんどろみがよい
	2. 素直である
思	3. 年下の子どもをかわいがる
い	4. 気がやさしい
や	5. 生き物をよくかわいがる
り	6. お手伝いをよくする
	7. 友だちに対して親切である
	8. 思いやりがある
	1. 友だちとよくけんかをする
	2. ことばづかいが荒い
攻	3. いうことを聞かない
撃	4. すぐ暴力をふるう
性	5. 友だちをつねったり叩いたりする
	6. 物を乱暴にあつかう
	7. 気に入らないことがあると暴れる
	8. 小さい子どもをいじめる

に配列して質問紙を作成し、母親に対して3段階評定を求めた。この2尺度は因子分析に基づいて構成されたものである。

4. 母親変数の測定

1) 養育ストラテジー

力中心ストラテジーか誘導的ストラテジーかを測定するために、末田ほか(1985)の作成した尺度を用いた(Table 2)。この尺度は、母親と子どもの間に生じるコンフリクト場面において、母親がどのような言動を行うか、それに対して子どもはどのような言動を行うか測定するために、6場面から構成されている。本研究では、その内、母親の養育ストラテジーに関する部分だけを用いた。得点が高いほど力中心(拒否的統制的)ストラテジーの方が誘導的(協調的)ストラテジーよりも多

く用いられるという測度となっている。

2) 養育態度

鈴木ほか(1985)の2尺度(受容、統制)から15項目を用いた(Table 3)。この尺度は、Shaeferの作成した項目を小嶋が翻訳したものを基に構成されている。

3) 向社会性

菊池(1988)の向社会的行動尺度から6項目を用いた(Table 4)。

4) 思いやり動機

森下・信濃(1995)の促進動機から4尺度(愛

Table 2 養育ストラテジー(力中心-誘導的)

- | |
|--|
| 1. 幼稚園へ行く時間が近づいているのに、子どもが遊びながらゆっくり食べているとき、
p「ちこくしますよ、さっさと食べなさい」
i「おもしろそうだけど、続きは帰ってからにしたら」 |
| 2. お母さんがあわてて戸をしめたので、うっかりと子どもの指をつめて、ケガをさせたとき、
p「そんなところに手をおいておくからよ」
i「いたかった、だいじょうぶ？」 |
| 3. 子どもといっしょに出かけるとき、子どもがぐずぐずして時間がなくなり、あわてて家を出ました。途中でお母さんは、戸じまりをわすれたことに気づいて、家に戻ったために、電車(バス)に乗りおくれたとき、
p「あなたがぐずぐずしているからでしょ」
i「これからは早く用意をしようね」 |
| 4. 手伝いをたのんだのに、子どもが「イヤだ」といって手伝おうとしないとき、
p「どうしてできないの、もう大きいんでしょ」
i「手伝ってくれると助かるんだけどね」 |
| 5. いつも子どもが楽しみにしているテレビ番組の時間に、お母さんがどうしても見たい番組があるとき、
p「いつも見てるでしょ、今日はお母さんが見るから、がまんしなさい」
i「お母さんの勉強だから、見せてね」 |
| 6. ほったらかになっていた子どものおもちゃを、お母さんがうっかりとふみつぶしたとき、
p「こんな所においておくからよ」
i「ごめんね、でもちゃんとかたづけようね」 |

■ 結果

Table3 親の養育態度

受容的態度	
	1. 子どもの悩みや心配ごとを理解している
	2. 子どもと一緒に、外出や旅行をするのが好きだ
受	3. 子どもにたびたび話しかける
容	4. 子どもがこわがっている時には安心させてやる
的	5. うちで子どもと楽しい時間を過ごす
態	6. 子どもが喜びそうなことを、いつも考えている
度	7. 子どものことに、じゅうぶん気を配っている
	8. 自分のことは我慢しても、子どものためにしてやるのがよくある

	1. 子どものした悪いことは、みな、何かのかたちで罰を与えるべきだと思う
	2. 子どもが外から時間どおり帰ってくるようにいつもさせている
統	3. 子どもを、自分の言いつけどおりに従わせている
制	4. 子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、ことこまかに言い聞かせる
的	5. 子どもがすべきことをちゃんとしままで、何回でも指示する
態	6. 子どもにはできるだけ私の考えどおりにさせたい
度	7. 子どもがいつけどおりにするまで、子どもを責めさせる
	8. 子どもに、自分でものごとを決めさせることはあまりない

他心・道徳観・共感性・良心) 20項目を用いた (Table 5)。

5) データの処理

まず、各尺度の得点を求めた。次に、親の変数が子どもの「思いやり」にどのような影響を与えるかを明らかにするために、各尺度得点間の相関計数を求めた。さらに、子どもの「思いやり」得点の高い群 (H) と低い群 (L) に分けて、母親変数の得点に関する分散分析を行った。

1. 思いやりと攻撃性の発達

思いやりが年齢によってどのように変化するかを明らかにするために、思いやり得点の平均値を求めた (Fig. 1)。分散分析を行った結果、年齢と性の交互作用 ($F(1,240) = 5.90, p < .05$) が有意

Table4 向社会的行動の項目

- | | |
|----|-----------------------------|
| 1. | バスや電車で立っている人に席をゆずる |
| 2. | 困っている人の相談にのる |
| 3. | 歳末助け合いなどの募金に寄付をする |
| 4. | 列に並んでいて急ぐ人のために順番をゆずる |
| 5. | 何か捜している人にはこちらから声をかける |
| 6. | 気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、手紙を出したりする |

Table5 向社会的行動の動機

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 愛 | 1. 何かしてあげたいと思ったから |
| 他 | 2. 素直に助けてあげたいと思ったから |
| 心 | 3. 困っている人の気持ちを考えるとそうしてあげたい気持ちになったから |
| | 4. 自分にできる限りのことはやりたいという気持ちから |
| | 5. 少しでも人のためになればよいという気持ちから |
| 道 | 6. 社会的良識だから |
| 徳 | 7. 道徳的にそうすべきだから |
| 観 | 8. 人間としての義務だから |
| | 9. 社会的に必要なだから |
| | 10. お互いに社会のみんなが協力すべきだから |
| 共 | 11. かわいそうだと思ったから |
| | 12. みるからに困っていらそうだったから |
| | 13. その人が哀れだったから |
| 感 | 14. その人を気の毒に思ったから |
| | 15. 誰もしないかったから |
| 良 | 16. 何もせずに見過ごしたら心のどこかに何かひっかかるから |
| | 17. やらないで後悔したくないから |
| | 18. やらないと自責に念にかられるから |
| 心 | 19. 見て見ぬふりをするよりも楽だから |
| | 20. 見過ごすのは良心が痛むから |

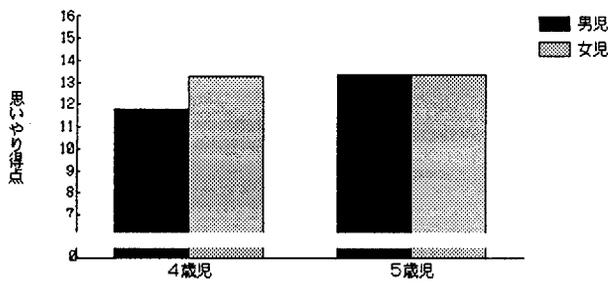


Fig. 1. 年齢男女別の思いやり得点

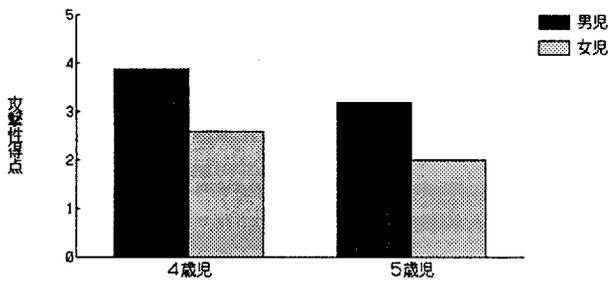


Fig. 2. 年齢男女別の攻撃性得点

であった。つまり、4歳男児の思いやり得点が他の群に比べて低いことが明らかになった。

それに対して、攻撃性は男女ともに4歳より5歳になるとやや低下するが、それ以上に性差が著しかった ($F(1,240) = 11.48, p < .001$)。つまり、女子の方が男子よりも攻撃性得点が高かった (Fig. 2)。

2. 子どもの「思いやり」と母親変数との相関

子どもの「思いやり」と母親変数との相関計数を示したのが Table 6 である。有意な相関計数に注目すると、結果は男女によって年齢によって異なっていた。

男児の場合、4、5歳児に共通している点は、母親の受容的態度が強いほど子どもの思いやり得点は高かった。それに対して、「道徳観」動機と思いやりの相関は、4歳児ではマイナスの、5歳児ではプラスの相関がみら

れた。4歳児ではそれ以外に有意な相関はみられず、5歳児では次のよ

うな結果であった。母親の「力中心戦略」が強いほど子どもの思いやり得点は低いのにに対して、母親の向社会的行動が多いほど、母親の「愛他心」や「良心」動機が強いほど子どもの「思いやり」得点が高かった。

女子に関しては、ただ1つ、5歳児の場合、母親の「共感性」動機が強いほど子どもの「思いやり」得点は高かった。

3. 母親の変数と子どもの思いやり

さらに、子どもの「思いやり」がどのような母親変数によって規定されるかを探るために、それぞれ4歳児、5歳児ごとに「思いやり」得点の高い者 (H) と低い者 (L) を、男女各15名ずつ、合計120名を選出した。次に、それぞれの群における母親変数の得点の平均値とSDを求めた。その平均値について年齢別に、2 (HL) × 2 (男女) の分散分析を行った。その結果、有意差の得られた母親変数は次の通りであった。

4歳児について、「力中心戦略」に関しては、性差のみが有意 ($F(1,59) = 4.81, p < .05$) であった。つまり男児に対する母親の「力中心戦略」得点は、女児に対する得点よりも高かった (Fig. 3)。「愛他心」に関しては交互作用 ($F(1,59) = 4.24, p < .05$) が有意であった。Fig. 4 に示すように、女児H群の母親の「愛他心」得点が、女児のL群や男児のH群の得点よりも高かった。「良心」についても交互作用 ($F(1,59) = 4.82, p < .05$) が

Table 6 母親変数と子どもの思いやりとの相関

母親変数	全体	男 児		女 児		
		4歳児	5歳児	全体	4歳児	5歳児
力中心戦略	-.228**	-.096	-.295*	-.067	.001	-.141
受容的態度	.292**	.264*	.302*	.041	.047	.032
統制的態度	.001	.118	-.074	-.034	-.039	-.032
向社会的行動	.343**	.153	.466**	.069	.112	.030
愛他心	.215*	-.077	.473**	.173	.229	.104
動 道徳観	.030	-.247*	.371**	-.003	-.072	.079
機 共感性	.010	.019	.207	.241	.189	.290*
良心	.139	-.026	.248*	.142	.146	.136

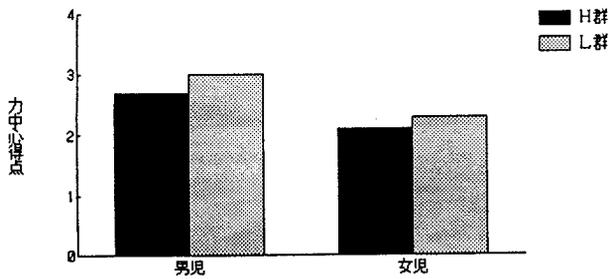


Fig. 3. 力中心ストラテジーと思いやり (4歳児)

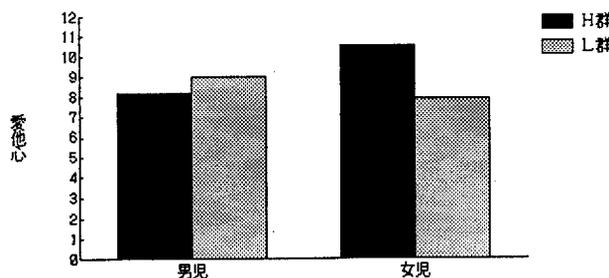


Fig. 4. 母親の愛他性と思いやり (4歳児)

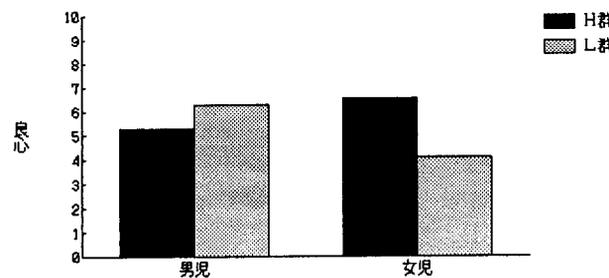


Fig. 5. 母親の良心と思いやり (4歳児)

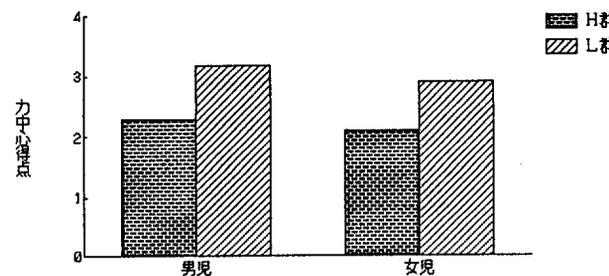


Fig. 6. 力中心ストラテジーと思いやり (5歳児)

有意で、Fig. 5に示すように、女児についてH群の母親の「良心」得点の方がL群の得点よりも高かった。

5歳児の場合、「力中心ストラテジー」に関して、交互作用はないがHL群間に有意差 ($F(1,59)$

$=5.84, p < .05$) が認められた。一般にH群の母親の方がL群の母親よりも「力中心ストラテジー」得点が低かった (Fig. 6)。「向社会性」に関してはHL群間に有意差 ($F(1,59) = 6.76, p < .05$) がみられ交互作用 ($F(1,59) = 5.89, p < .05$) も有意であった。男児に関してH群の母親の方がL群の母親よりも「向社会性」得点が高かった (Fig. 7)。しかし、女児には差がみられなかった。「愛他心」についてもHL群差 ($F(1,59) = 10.01, p < .01$) と交互作用 ($F(1,59) = 5.58, p < .05$) が有意であった。男児についてH群の母親の「愛他心」得点が高いのに対してL群の母親の得点が低いのが特徴であった (Fig. 8)。女児には差がなかった。「道德観」についても、HL群 ($F(1,59) = 4.73, p < .05$) 間に有意差あり、交互作用 ($F(1,59) = 2.86, p < .10$) にも有意な傾向がみられた。男児についてH群の母親の「道德観」得点が高いのに対してL群の母親の得点が低いのが特徴であった (Fig. 9)。「共感性」についてHL群間のみには有意差 ($F(1,59) = 4.15, p < .05$) がみられ、男女ともにH群の母親の方がL群の母親よりも得点が高かった (Fig. 10)。

■ 考 察

4歳から5歳かけて「思いやり」は女子では変化なく、男子では上昇していた。性差については、4歳児では女子の方が男子よりも得点が高いのに対して、5歳児では差が見られなかった。したがって、女児における思いやりの発達は少なくとも男児よりも1年早いのではないかと考えられる。

それに対して、攻撃性は男女ともに4歳より5歳になるとやや低下するが、それ以上に性差が著しかった。つまり、男児の方が女児よりも攻撃性が高く、攻撃性に対する制御の発達が遅れると考えられる。この点は従来の多くの研究結果と一致している。

子どもの「思いやり」と母親の変数との関連には、一般に性差はあるが年齢差はないだろうと予想していた。しかし、結果は多くの点でちがひ、その関連は男女によって異なるとともに年齢によっても異なっていた。4、5歳児に唯一の共通点は、男児の場合、母親の態度が受容的なほど子どもは「思いやり」得点が高かった。この結果は、従来の研究結果と一致するものである。また、男児の場

合、有意な相関は4歳児では少ないが5歳児では多かった。女児では有意な相関は5歳児に1つだけみられた。このような関係は次の分析でより浮き彫りになった。

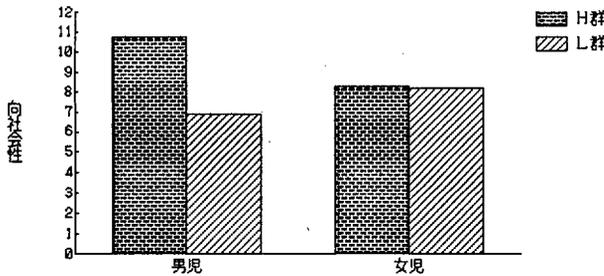


Fig. 7. 母親の向社会性と思いやり (5歳児)

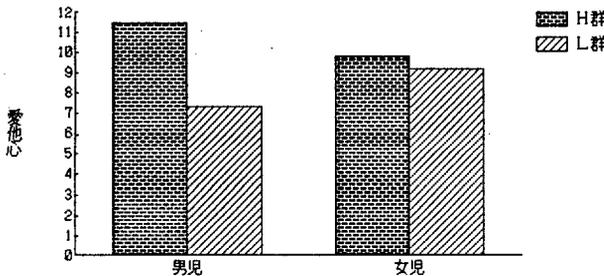


Fig. 8. 母親の愛他性と思いやり (5歳児)

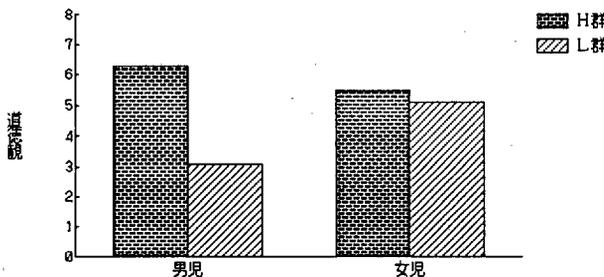


Fig. 9. 母親の道徳観と思いやり (5歳児)

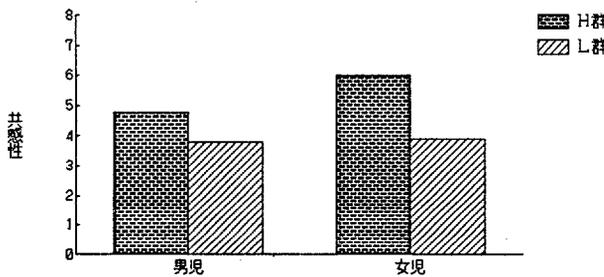


Fig. 10. 母親の共感性と思いやり (5歳児)

「思いやり」の高い子どもの母親と低い子どもの母親との比較によると、男女に共通した結果は、いずれも5歳児について次のような点が認められた。つまり、「思いやり」得点の低い子どもの母親の方が高い子どもの母親よりも「力中心戦略」の得点が高かった。したがって、「力中心戦略」は子どもの「思いやり」の形成にマイナスの効果をもたらし、「誘導的戦略」はプラスの効果をもたらすと推測される。また、5歳児の男女に共通して「思いやり」得点の高い子どもの母親の方が「共感性」が高かった。このことから、母親の「共感性」が子どもの「思いやり」形成にプラスの効果をもたらす可能性があると考えられる。

さらに男児の場合、4歳児については「思いやり」得点の高い子どもの母親と低い子どもの母親との間にはすべて差がなかったが、5歳児については、「思いやり」得点の高い子どもの母親の方が「向社会性」が高かった。つまり、母親が日常たくさんの向社会的行動を遂行することが、男児の「思いやり」の形成にプラスの効果をもたらすと考えられる。この時、モデルとしての母親の行動が大きな役割を演じているのではないかと推測される。また、5歳男児にとって「思いやり」得点の高い子どもの母親の方が、向社会的行動の動機としての「愛他心」や「道徳観」が高いという結果から、男児の思いやり形成に母親の「愛他心」や「道徳観」が影響している可能性がある。

女児の場合、4歳児において「思いやり」の高い子どもの母の方が低い子どもの母親よりも「愛他心」や「良心」得点が高かった。つまり、向社会的行動の動機としての「愛他心」や「良心」が、女子の「思いやり」の形成に影響するのではないかと考えられる。

以上、男児の場合、母親の養育戦略や「思いやり」動機等に関する特徴は、年少児の「思いやり」の形成に対して明確な影響を与えるとはいえないが、年長児になるにつれてその影響のパターンは明確になると考えられる。つまり、年長児になると「誘導的戦略」を媒介とする母親との相互作用を通じて「思いやり」が形成される。また、母親の豊かな「思いやり行動(向社会的行動)」へのモデリングや、「愛他心」「道徳観」「共感性」などを豊かにもつ母親との相互作用を通じて「思い

やり」が形成されると考えられる。

女兒の場合、年少児に対しては母親の「愛他心」や「良心」動機が、年長児に対しては母親の「誘導的ストラテジー」や「共感性」が「思いやり」の形成に影響すると考えられる。ここでもそのような母親との相互作用のなかで母親へのモデリングなどを媒介として、子どもの「思いやり」が形成されていくと考えられる。

本研究の問題点として、子どもの「思いやり」の測定の問題があげられる。子どもの「思いやり」についての母親の評定が信頼性や妥当性の高いものであるかどうか、幼稚園の担任教師の評定と一致するかどうか、実際の行動の観察による測度との関連はどうかなどの課題が残されている。また、子どもに関するデータも母親に関するデータもいずれも母親自身による評定に基づいていたという点は問題である。つまり、個人内における反応セットが結果に影響している可能性がある。しかし、子どもの年齢や性別によって変数間の関連が異なっていたという点から、そのような影響を一応除外することができる。

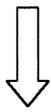
今後の課題として、子どもや親の「思いやり」の測定の問題とともに、子どもを取り巻く人々（家族、教師、友だち等）が、子どもの「思いやり」の形成に対してどのような影響を与えるかについて、きめの細かい長期的な研究が必要である。

■ 引用文献

- 1) 東 洋・柏木恵子 1989 教育の心理学 有斐閣
- Bandura,A., & Walters,R.H 1963 Social Learning and Personality Development. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- 2) Eisenberg,N. & Mussen,P.H. 1989 The roots of prosocial behavior in children. Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美訳 1991 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- 3) Hoffman,M. L. 1963 Parent discipline and the child's consideration for others. Child Development, 34, 573-588.
- 4) 菊池章夫 1988 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル— 川島書店
- 5) 小嶋秀夫 1991 児童心理学への招待 サイエンス社
- 6) 森下正康 1985 幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング—教師モデルに関する受容的—拒否的態度の認知の影響— 心理学研究, 56,138-145.
- 6) 森下正康 1996 子どもの社会的行動の形成に関する研究 風間書房
- 7) 森下正康・信濃淑子 1995 向社会的行動の動機因子に関する研究 和歌山大学教育学部紀要—教育科学— 45,29-44.
- 8) 森下正康・仲野 綾 1996 児童の共感性の認知的因子と情動的因子が向社会的行動におよぼす影響 和歌山大学教育学部紀要—教育科学— 46,57-71.
- 9) Mussen, P. & Eisenberg-Berg, N. 1980 Roots of Caring, Sharing and Helping: The Development of Prosocial Behavior in Children. (菊池章夫(訳編) 1980 思いやりの発達心理 金子書房)
- 桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, 34, 342-346.
- 10) 末田啓二・庄司留美子・森下正康 1985 母子相互の対応様式分析—質問紙法による母子の対応連鎖の特徴—和歌山信愛女子短期大学信愛紀要, 25, 31-38.
- 11) 鈴木真雄・松田 惺・永田忠夫・植村勝彦性 1985 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告, 34, 139-152.
- 12) 首藤敏元 1985 児童の共感と愛他行動—情緒的共感の測定に関する探索的研究— 教育心理学研究, 33, 226-231.
- 13) 高木 修 1983 順社会的行動の動機の構造 日本社会心理学会編 災害の社会心理学(年報社会心理学, 24) 187-207.
- 14) 高野清純 1982 愛他心の発達心理学: 思いやりと共感を育てる 有斐閣
- 15) Zahn-Waxler,C., Radke-Yarrow,M., & King,R.A. 1979 Child rearing and children's prosocial imitations toward victims of distress. Child Development, 50,319-330.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要 約

幼児期の母子関係が子どもの「思いやり」の形成にどのような影響を与えるかについて、相互作用とモデリングという視点から検討した。4歳児と5歳児の母親241名を対象に質問紙を実施した。分析の結果、年齢や男女によって結果は異なっていたが、一般的に「誘導的戦略」「向社会的行動」「愛他心」「道徳観」「共感性」などを豊かにもっている母親との相互作用を通じて、子どもは思いやりを形成してゆくことが示唆された。